

教員活動状況報告書

提出日：令和 6 年 2 月 20 日

所 属： 獣医学部 獣医学科

氏 名： 善本亮

職位：教授

役 職：

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

【獣医薬理学総論、各論、実習】

薬物と生体の相互作用に関する概念から、各薬物の作用機序、薬物治療の基本的な考え方などについての講義を行う。実習では生きた動物や臓器などを用い、学生自らが手を動かし、得られた結果に対して共に議論・考察することで、薬理実験の手技を経験するとともに、講義で学んだ知識の定着を図る。

【総合獣医学（薬理）】

ポイントを押さえながら全体を再整理することで、国家試験対策の手助けとなるような講義を行う。

【研究室所属生】

研究テーマの背景の学習、研究テーマの選定、仮説設定、実験的検証、考察を繰り返すことを通じ、調査する力、主体的に考える力、論理的思考力の習得に導くとともに、講義・実習で忙しい中でも着実に実験を進めるために必要な自己管理能力を醸成する。

科目名	学科・専攻	必，選， 自	配当年次	受講者数
獣医薬理学総論	獣医学科	必	3	142
獣医薬理学各論	獣医学科	必	3	140
獣医薬理学実習	獣医学科	必	3	140
総合獣医学（薬理）	獣医学科	必	6	166

2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

獣医学科の卒業生は、動物の生命科学、疾病、治療を学んだ学生と見なされ、期待される。薬理学は獣医、医薬、薬学でしか学ぶことができない学問であり、社会からの期待も大き

い。薬理学を通じて得た知識や考え方は臨床での薬物治療や医薬品開発のみならず、自身が処方される医薬品の効果や安全性、非合法薬物やオーバードーズのリスクなど、身近な薬物を正しく理解することにも役立つ。また、卒業研究は答えが用意されていない課題に対し、初めて科学的にアプローチする機会でもある。近年は健康や医療に関する疑似科学的な言説が広く浸透しているが、科学的素養・思考力を育むことで、振り回されることはなく、ましてや獣医師として治療に利用することはあり得ない。薬理学や卒業研究を通じ、科学的思考を身につけた学生の育成を目指している。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

講義：医薬品は商品であり、その開発の背景にはニーズがある。一方、医薬品の開発には科学技術の発展が不可避であり、効果には科学的裏付けもある。薬物名、作用機序の羅列ではなく、医薬品開発の経緯などを伝えることで、薬物や生命科学全般に興味を生涯抱けることができるような講義を行う。

研究：調査・仮説・検証・考察のサイクルを繰り返す、課題発見能力や科学的思考力を身につける。

アクティブラーニングについての取組

当日の講義内容に沿ったテストおよび自由質問欄を講義終了後學理に1週間提示し、採点、質問への解答を実施している。提出は任意としているが、概ね100%の提出率となっている。解説欄には正答だけでなく関連する薬物や作用機序をまとめて解説し、回答後の頭の再整理や、試験前に見返して利用しやすいような形式にしている。また、繰り返し解答をできる形式のテストを追加提示し、自発的な復習や試験前の対策に利用させている。

ICTの教育への活用

講義資料のスライドを授業1週間前、講義動画はGoogle Meetsで録画し、授業終了1～2日以内に學理に提示している。また小テストも學理で実施している。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

- ①教育（授業，実習）の創意工夫（B）
- ②学生の理解度の把握（B）
- ③学生の自学自習を促すための工夫（B）
- ④学生とのコミュニケーション（質問への対応等）（B）
- ⑤双方向授業への工夫（C）

・22年度の講義を振り返り、23年度は全ての授業資料の修正を行った。また、文面でイメージがつかみにくいような内容では、GIFアニメーションや動画を用いた。

・定期テストの出来から考えると講義の内容はそれなりに理解していると思えるが、実習で学生と直接話してみると、根本を理解していないことに気づかされたことが本年度も何度かあった

・授業後の復習と評価を目的とした期限を区切った小テスト、定期試験に向けた自主学習用の小テストを実施している

・実習中に学生と話すことにより授業の理解度を把握できるが、講義では質問にくる学生が非常に限定されており、23年度は學理上での質問も非常に少なかった。150人近くの聴講生がいる講義で双方向性を出すことは難しいと感じている。

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

・混乱しやすい薬理作用（嘔吐薬 vs 制吐薬、受容体作動薬 vs 受容体阻害薬）、よく問われる有害作用とその症状（抗菌薬、抗腫瘍薬）を整理し、強調して講義した

・膨大な薬物名と作用機序を丸暗記しがちな項目（駆虫薬、消毒薬）に関しては、寄生虫の生理に基づいた薬物であること、特徴ある消毒薬を抜き出すなど、整理した上で暗記できるような資料を作成した

5. 学生授業評価（分量の目安：4～7行（160字～280字））

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

授業評価の結果をまだ受け取っていないため未記載とする

②①の結果はどうでしたか。

同上

③②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

引き続き学生の指摘要望には速やかに対応する

6. 学生の学修成果

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

暗記テストとしての観点からは、ポイントが分かりやすい講義資料・説明になるよう、継続的に改善する。ただし、ベースとしては薬理学の基本が理解できること、薬理学が生理学や生化学などと繋がっていることを実感してもらい体系的な知識習得を自ら目指すようになること、薬物に興味を持ち続けられるような講義・実習にしたいと考えている

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

授業評価の結果をまだ受け取っていないため未記載とする

7. 指導力向上のための取組（FD研究会参加状況）（分量の目安：1～2行（40字～80字））

FD研修会には全て参加した。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

講義：學理小テストや自由記載欄の改良を行い、暗記ではない理解度を図るような試みを行うとともに、学生からの優れた質問などを共有することで、他の学生にも良い影響を与える試みを行いたい。長期的には、学生からもっと質問が出るような仕組みや授業形態を考えたい。

卒業研究：研究背景の説明、実験系の概念説明の上で実験の指導を行っているが、学生の授業や実習の都合上、集中的に実験を行う期間が非常に少なく、論文もほとんど読めていないため、研究に対する成長は非常に遅い。秋から文献ゼミを開始したが、その頻度を高めることで科学的思考力の獲得ペースを少しずつ高める。また、研究テーマを大きく2つに区分し、学生同士でも相談・議論する体制を今後作成することを考えている。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

（自ら作成するもの）

授業に関するもの：シラバス，小テスト，試験問題，授業資料